# 会　議　記　録

次のとおり会議記録を公表します。

| | |
|---|---|
| 会 議 名 | 第１回瀬戸・高松広域連携中枢都市圏域若者会議 |
| 開催日時 | 平成３０年５月３０日（水）<br>１４時００分～１６時００分 |
| 開催場所 | 高松市役所　１１階　１１４会議室 |
| 議　　題 | (1) 会議の位置づけについて<br>(2) 瀬戸・高松広域連携中枢都市圏ビジョンについて<br>(3) 会議の進め方について |
| 公開の区分 | ■　公開　　□　一部公開　　□　非公開 |
| 上記理由 | |
| 出席者 | 松岡部会長、桑村副部会長、西川様、瑞田様、眞鍋様、六車様、三谷様、中川様、寺下様、平井様、圓藤様、福西様 |
| オブザーバー | 大学生　３人 |
| 傍 聴 者 | ０ 人　　（定員　５　人） |
| 報道機関 | １ 人 |
| 担当課及び連絡先 | 政策課（839－2135） |

| 会議経過及び会議結果 |
|---|
| 会議の概要は、次のとおり<br><br>**議題（１）会議の位置づけについて**<br><br>**【別添資料により、会議の位置づけ（瀬戸・高松広域連携中枢都市圏ビジョン懇談会の部会）について事務局から説明】**<br><br>また、会議は、原則として公開とすることを決定した。<br><br>**議題（２）瀬戸・高松広域連携中枢都市圏ビジョンについて**<br><br>**【別添資料により、瀬戸・高松広域連携中枢都市圏ビジョンの概要について事務局から説明】**<br><br>（参加者）<br>範囲が広いが、我々は２年間でどれだけのことをやらなければいけないのか。<br><br>（事務局）<br>既存事業に対する意見をいただきたい。また、中長期的に取り組みたいものなどについても、意見をいただきたい。<br><br>（部会長）<br>今年度何件出さないといけない、といった数値目標はない。また、この会議で出た意見がすべて反映されるわけではなく、ビジョン懇談会に説明し、内容を精査することになる。 |

| 会議経過及び会議結果 |
| --- |

**議題（３）会議の進め方について**

**【別添資料によりスケジュール、意見書の提出について事務局から説明】**

（部会長）
連携協約の１－イ「産業クラスターの形成、イノベーション実現、新規創業促進、地域の中堅企業等を核とした戦略産業の育成」、１－ウ「地域資源を活用した地域経済の裾野拡大」が弱点である。ここを強化する方向で議論を進めたい。

（参加者）
基本構想にある将来人口推計だが、この数値を、行政はどのように感じているのか。

（事務局）
行政としては危機感を持っている。高松市の場合は、創生総合戦略に基づいて、移住促進などに取り組みながら、現状では４２万人を維持している。

（参加者）
これからテクノロジーが発展していくと、働くところがなくなることも起こり得る。人口減少の進行と働き方の変化についてはどのように考えているか。

（事務局）
個人的意見として、ＡＩなどが発展し、仕事の在り方が変化していく中でも、まちの活力を維持するためには、人口減少を抑制する必要があり、それに向けて、子どもの居ない世界にならないような施策を検討していきたいと思っている。

（参加者）
連携市町は高松市に比べ財源が少ないため、未来への投資が難しい状況にある。高松市がある程度財源を負担しながら、連携市町と協力して事業を実施するようなことはできるか。

（事務局）
高松市を中心として圏域を形成している以上、けん引役としての責任を果たしていきたいし、圏域全体の活性化につながるような手法で事業を実施していきたい。

（参加者）
圏域の中小企業やイベントに関する情報などをお互いに把握できていない。それぞれのまちの情報を圏域全体で共有・発信できれば、圏域内の交流が活発となり、ＳＮＳでの拡散などを通じて、県外、海外の方にも広がっていくのではないか。オブザーバーの皆さんは、県内の中小企業を知っているか。

（オブザーバー）
あまり知らない。

（オブザーバー）
　一部の企業は知っている。最近では、就職活動で大学の地域格差を感じている学生がおり、一度は都会で就職した後に、地方を活性化するために、地元に戻るという人もいる。そういう点では、地域の情報に触れる機会は早い方が良いと感じている。

（部会長）
　オブザーバーの３人やその周囲は、平均的な学生だと思う。特に大学生と地元との接点は、就職活動がスタートラインとなっていることが多い。ＣＯＣ事業の一環として、最近では、大学内に企業が紹介ブースを出展したり、実践型インターンシップという形で、学生と企業が問題解決のために活動するといったものもあるが、まだまだ十分には手が打てていない。

（参加者）
　就業したら住むことになるが、香川県は移住に関するＰＲや施策に取り組んでいるのか。

（事務局）
　香川県には、災害が少ないなどの地理的な強みや住みやすさがたくさんあるので、各自治体でも移住、定住に力を入れ様々な施策を講じている。

（参加者）
　住みやすさというのが、県外の人にはわかりにくい。栗林公園などの有名なものだけでなく、各地域にある特色ある小さな資源についても、良いところはたくさんあるので、それをＰＲしていく考えはあるのか。

（事務局）
　７月頃に首都圏で移住に関する相談コーナーを開設する準備を進めている。ずっと住んでいる人からすると、当たり前になって良さに気づかないところもあるので、移住者の目線で見た圏域の良さを様々なコンテンツでＰＲしていきたい。

（参加者）
　社会増を目指すときに、支店経済都市であること、人口が増えることを前提とした経済成長モデルは変えていかなければいけない。
　また、行政も民間もお互いが自分のことしか知らない。実際に取り組んでいる事業でも連携実施に至っていないという評価がある。この会議では、民間で考えた取組を、行政がバックアップできるようなものを考えたい。現状として行政間の連携はどのように行っているのか。

（事務局）
　年数回、広域連携中枢都市圏担当者間会議は実施しているが、事業担当者同士の連携には至っていないことも多く、課題と認識している。

（参加者）
　直島は、現在、来訪者の多くが外国人であり、特に富裕層が多いこともあり、ヘリポートや係留場所についての要望が多い。
　圏域内をヘリコプターで移動することができるようにするなど、大都市とは違った海外の方の受入体制があっても良いと思う。

（参加者）
　小豆島も、台湾の方が多く訪れており、非常に重要な存在となっている。また、島という物理的な障壁もあるが、今後はより高松を身近に感じていくことができればと考えている。

（参加者）
　高松空港に関して、台湾は５年前の就航時に週２便だったのが、今は週６便となっている。また、旅客のうち７割がインバウンドの方であり、今後数年間はインバウンドの増加が見込まれるという状況の中で、今はインバウンドの方が、より香川県の良さを知っているという逆転現象が起きている。四国や香川県に来られるインバウンドの方の多くは、日本へのリピーターであり、大都市圏を経験したあと、古き良き日本を感じられる瀬戸内地域に魅力を感じて来訪している。インバウンドで来訪する外国人の方の移住につながるように、外国の方が魅力に感じているところを、さらに伸ばしていきたい。

（参加者）
　子どもにとって思い出になるヒト・モノ・コトを提供することも取り組んでいきたい。綾川町では、保育所・幼稚園の年中から小学校低学年を対象とした、子どもまつりを開催して８年目になる。そういったイベントで、その地域にどういう仕事がある、どんな人がいるなど、インバウンドの増加のようには効果が見えにくいものではあるが、地元の愛着につながっていけば良いと考えている。

（参加者）
　さぬき市で農業体験を企画しているが、田んぼに入ることに対して、子どもだけでなく、大人も懐かしく思ってくれる。また、市内の施設を有効に活用して体験事業を実施することで、にぎわいが生まれた経験もあり、これからも取り組んでいきたい。

（参加者）
　小豆島は、船でしか行けないことが強みになるとも考えている。小豆島行の航路がある港などの施設に圏域をＰＲできる場所があると良いと思う。

（参加者）
　事務局へのお願いとなるが、この会議の参加者の注力していることや関心のあることなどの情報を共有したい。また、ＫＰＩの設定について、より効果的な指標を設定することで、各自治体の計画全体の確度が上がるなど、良い影響があると思う。

（事務局）
　参加者についての情報共有は、事務局で取りまとめて提供したい。
　ＫＰＩについては、すぐに変更というのは難しいが、次期計画を立案する際などの参考としたい。

（部会長）
　情報共有などを図りながらお互いの意見を深めていくなかで、良いアイデアが出てくることを期待する。オブザーバーから一言ずついただきたい。

（オブザーバー）
　大学のディベートと比較すると、スペシャリストの方達の議論は面白く、様々な視点からの意見があり、勉強になった。高松は良い所だと思っているので、効果的な発信に取り組むと良いと感じた。

（オブザーバー）
　私は県外出身で、県内で遊ぶときには、よく調べ、理解した状態で遊びに行く。会議の中であった、県外や、海外の人の方が良さを分かっているという意見は共感できた。また、私自身、ＳＮＳで知ったことが多いので、ＳＮＳの拡散力を利用した取組も行われれば、若者への情報発信に成功し、経済発展にもつながると思う。

（オブザーバー）
　このような機会に参加できて、実際に事業をしている方の話を聴ける機会は素敵だと感じた。各市町の問題点を共有することも大事だと感じた。ありのままの香川県を発信して、香川県を好きになってもらえれば、１０年後の未来が楽しいものになるのではないかと感じた。

（副部会長）
　私自身、三豊市でも事業をしているが、仁尾町の父母ヶ浜はＳＮＳで爆発的な人気になっている。また、農業体験などを三豊市で実施すると、参加者は高松市や坂出市の方が多い。圏域内で開催されるイベントについても、実は圏域内を始めとする、県内の他の市町に参加したい層がいるのではないか。そういう人たちを堀り起こすためにも、情報の共有が必要だと感じる。
　また、香川県はイベントが多く、日によっては、主催者や参加者も錯綜している状態である。私は移住者だが、香川に来て、県内のイベントを、多くの人が一覧的に可視化できたら良いと考えている。

（部会長）
　本日の会議は以上とする。７月に向けて、意見の提出をお願いしたい。